

## ひびけ 幸手和だいこ

がくしゅう  
学習した日

月 日

ドンツ、ドンツ。

小学三年生になったばかりのたかしくんは、たいこのうち方教室にさんかしていました。たいこをうつと大きな音が耳に入り、手からはビリリとしたしんどうが体につたわります。とてもいい心地がしました。その帰り、「もっとじょうずにやりたい。」そう決心して、たかしくんは幸手和だいこほぞん会に入ることになりました。それからというもの、土曜日と日曜日は毎週たいこのれんしゅうにうちこみました。

「たかしくん、リズムがずれているよ。」

八月になり、今日もたいこのれんしゅう中です。ギュツとばかりをにぎり、みんなに合わせるようにドンツとたいこをたたいたのですが、みんなと合いません。

(はあ。またかあ……。)

何回もちゅういされているのに、なかなかうまくできない自分にイライラがたまり、

(なんでぼくだけできないの。もうたいこなんか見たくない。)

たかしくんはなみだがこぼれそうになりました。

その時、

「今年、入会した子はあつまって。」

という声が聞こえました。その声は幸手和だいこほぞん会をつくった会長の栗原先生の声でした。みんなをあつめると、





先生は去年行われた東日本大会につながる県大会「創作和だいこ大会」のビデオを見せてくれました。この大会で幸手和だいこほぞん会はゆうしようしたのです。かたまでふりあげている手。しんけんまなざし。こきゆうを合わせようとしている気もち。すべてが生き生きしていました。

「あんなふうになりたいね。」

となりで見ていた友だちがたかしくんに話しかけました。

(たしかに、あんなにじょうずにできたらいいな。でも……。)

たかしくんは、だまったまま、じっとビデオを見つづけていました。

ビデオを見おわると栗原先生が話し出しました。

「今、見てもらったように、幸手和だいこは、今、幸手市をだいひょうするげいのうといえるくらいになったんだ。でもね、さいしょからすべてがうまくいったわけではないんだよ。」

(え……。)

たかしくんはおどろきました。

「幸手和だいこほぞん会ができたのは、だいたい二十五年前のことなんだ。まつりでたいこのたたき手がいなくなったのをきっかけに、幸手にすんでいる自分たちでたいこのげいのうを作り上げていこうとなったんだ。でも、さいしょのれんしゅうばしはぼう音しせつのないところだったから、近所にめいわくをかけないように一けん一けんおねがいしてれんしゅうをさせてもらっていたんだよ。たいこの数もないので車のタイヤや竹をよこにしてれんしゅうをしていたんだ。」



「そんなに大へんだったのに……なぜ、二十五年間も。」

思わず、たかしくんが聞くと、

「そうだね、やめようと思ったときもあったよ。だけどね……和だ  
いこのよさをみんなにつたえたくて、きょう土幸手のほこれるげ  
いのうをつくろうと思ってつづけてこられたんだ。」

たかしくんはグツとせなかをおされた気がしました。

「このえんそうを聞いて、ひがしにほんだいしんさい東日本大震災のひさい地の人やびょう  
気の子も元気になってくれたことがあったよ。そうやって和だい  
このよさをつたえていく

ことを、きみたちにも引  
きついではしいし、幸手  
に長くつづくげいのうと  
してのこしていってほし  
いんだ。」

(そうか……。)

たかしくんは、そんなふう  
に話す栗原先生が一だんと  
大きく見えました。

栗原先生は話しおえると、「さあ、れんしゅうさいかい。」とよびかけました。た  
かしくんはいそいで立ち上がりました。そして、カいっぱいうでをふり上げました。

● 自分の目標やめあてに向かっ  
てがんばってよかったな、と思っ  
たときの気持ちを書いてみましょう。

★ 幸手には他にどんなきょう土げいのう  
があるのでしょうか。それをささえる  
人たちの思いも調べてみましょう。